

氏名	こめ だ ひで つぐ 米 田 英 嗣
学位(専攻分野)	博 士 (教 育 学)
学位記番号	教 博 第 62 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	教 育 学 研 究 科 教 育 科 学 専 攻
学位論文題目	物 語 理 解 に お け る 感 情 の 処 理 過 程

論文調査委員 (主査) 助教授 楠見 孝 助教授 齊藤 智 教授 吉川左紀子

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、物語理解における主人公と読者の感情過程に関して実験的に検討したものである。7章、9つの実験から構成されている。

第1章は“序論”である。“1.1.1 物語理解と感情”では、物語理解と感情の用語を定義し、概念を整理している。“1.1.2 物語理解における状況モデル”では、状況モデル構築を説明するモデルとして、イベントインデックスモデルとランドスケープモデルを取り上げ、両モデルが主人公の感情、読者の感情、主人公と読者の相互作用から生じる感情をいかに説明しているかを論じている。“1.1.3 問題の所在”では、物語の主人公の感情、読者の感情、主人公と読者の性格特性の相互作用から生じる感情を検討することが、本論文の目的であるとしている。

第2章“物語読解における感情の変化”では、読者が物語を理解する際に生じた感情を明らかにするために、連想法を用いて読者の感情を1文ごとに抽出し、クラスター分析と対応分析を用いて、感情の時系列変化を検討している(実験1)。そして、読者が物語を読解する際に生じる感情は、物語の展開に応じて時系列で変化することを示している。

第3章“状況モデル構築における主人公の感情シフトの効果”では、読者がいかにして主人公の感情変化を検出しているかを、主人公への共感を促す共感読解(実験2)、普通に物語を読む通常読解(実験3)を用いて検討している。両実験の結果は、主人公の感情シフトによって読解時間が増加することを示し、読者が主人公の感情シフトを経験する際に状況モデルを更新していることを示唆している。

第4章“物語理解における読者の感情の役割”では、物語理解における感情の役割、特に共感、予感が物語理解に及ぼす効果を明らかにするために、小説を題材として、再読による各文の重要度評価の変化(実験4)と感情評価(違和感、予感、共感)の変化(実験5)を検討している。その結果、物語の結末を知ってから再読することによる文の重要度の変化にとまらぬ、読者の違和感が減少する一方で共感が増加することを明らかにしている。

第5章“登場人物に対する読者の感情・情動変化”では、感情に加えて情動の変化過程も検討している。小説を用いた感情評定実験の結果、読者は物語を読み返すことで、登場人物に対する共感が増加し、読者の悲しみ、怒り、驚きといった情動は物語の前半読解後よりも後半読解後に増加した(実験6)。オンライン実験の結果、読者の悲しみは物語の後半読解後に増加し、再読後にも減少しなかった。驚きは、後半読解後には増加するが、再読後には減少した(実験7)。両実験の結果から、読者は物語を再読することで、登場人物の中でも特に主人公に共感し、悲しみが増したことを示唆している。

第6章“物語読解における主人公と読者の感情認識”では、理解過程における主人公の感情推論と読者自身に喚起された感情に関して、主人公の感情状態の推論課題と、読者自身の感情評価を分離する課題を用いて、両者の性格特性の相互作用を検討している。読解時間の結果は、主人公の感情を読者が推論した場合は、両者の外向的性格特徴が類似した場合に読解が促進された(実験8)のに対し、読者自身の感情を評定した場合は、類似性による促進効果は見られなかった(実験9)。さらに、読者と主人公の類似性の程度は、主人公の感情評定には影響したが(実験8)、読者自身の感情評定(実験

9)には影響しなかったとしている。

第7章“総合的考察”では、9つの実験から明らかになったことをまとめ、“読者-主人公相互作用モデル”を提案し、物語理解における主人公と読者の感情過程に関する研究を統合的に説明している。そして、物語理解における主人公と読者の感情過程研究の今後行なうべき研究の方向について示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、物語理解における主人公の感情、読者の感情、主人公と読者の性格特性相互作用から生じる感情といった、それぞれの感情情報の処理過程を実験的に解明したものである。それは、工夫されたパラダイムを用いた9つの実験を行い、さらに、“読者-主人公相互作用モデル”を提案し、物語理解における主人公と読者の感情過程を統合的に検討した先進的論文である。

その論文の特色は以下の4点である。

- (a) 従来十分に解明されていなかった物語理解における感情過程を、巧みな実験によって多面的に解明している点
- (b) 豊富な実験データに基づいて、適切な多変量解析法を駆使し、知識表象の構造とプロセスを解明している点
- (c) 物語理解における感情過程を説明するために、従来の状況モデルを改訂した“読者-主人公相互作用モデル”を提案している点
- (d) 感情、対人認知、心の理論などの広範な心理学研究への示唆、および国語教育における応用可能性、神経科学研究への発展性を持つ点

第1章では、物語理解における感情を、主人公の感情・読者の感情・両者の相互作用の3つに整理している。さらに、従来の物語理解に関するモデルの問題点として、イベントインデックスモデルについては(1)5つのインデックスの機能が未解明である点、(2)感情を独立の次元として扱っていない点、ランドスケープモデルについては(3)物語の主人公と読者の感情の相互作用が説明できない点を挙げているところに、本論文の着眼点の鋭さが見られる。

第2章における、物語を理解する際の感情を連想法で抽出し、クラスター分析と対応分析を用いて、感情の時系列変化を検討する方法は、ユニークな手法として評価できる。そして、連想法で捉えた感情は、読者が経験した感情と登場人物に生じたと考えられる感情の混成物であるとする位置づけは、2つの感情の分離の難しさを指摘した点で重要である。

第3章では、主人公の感情が変化する材料を構成し、2つの実験に基づいて、主人公の感情の変化が読解時間を増加させること、読者の自我関与が、因果変化の検出に影響を与えることを示している。これは、感情が状況モデル構築に影響を与え、物語理解のコンポーネントであることを示した点で、重要な発見である。なお、この実験報告が一流学術誌 *Memory & Cognition* に掲載されたことから、その新規性と学問的水準の高さが示されている。

第4章における、ミステリー小説を材料に用いて、初読と再読を比較する読解実験は、現実に即した巧みな手法として評価できる。そして、読者は正しい理解をするために、違和感、予感などの感情反応を手がかりにして解釈を変更しながら主体的に読解するという重要なプロセスを見いだしている。

第5章では、物語の登場人物に対する読者の感情変化、不安、悲しみなどの7つの情動の生起を検討して、読解における読者の情動変化を多面的に明らかにしている。とくに、読者は物語を再読することで、主人公への共感が高まり、悲しみなどの情動が強まるという指摘は、小説を再読する意義に関わる重要な示唆である。

第6章では、読解における主人公と読者の性格特徴の相互作用を検討した全体のまとめとなる実験である。その結果、読者と主人公の性格類似性が、共感を通して、主人公の感情推論に影響したが、読者自身の感情判断には影響しなかったことは、読解研究のみならず対人認知研究としても興味深い発見である。

第7章において、9つの実験の結果をもとに提起した“読者-主人公相互作用モデル”は、この研究分野の理論的展開への大きな貢献である。さらに、今後の展望として示した認知神経科学研究を現在進めている点は、高く評価できる。

以上のように本論文は、物語理解における感情に関して、オリジナルな着想に基づき、新たに開発した巧みな実験手法と多変量解析を駆使して、重要な多くの成果をあげているが、今後に残された問題として以下の点が指摘できる。

- (a) 感情変化に関する時間的構造の解明

- (b) 基本感情以外の複雑感情の解明
- (c) 主人公の感情から物語全体の感情までの異なるレベルの感情統合の解明
- (d) 対人認知における他者感情理解能力，心の理論との関連性の検討

しかし，こうした点は，本論文で見出された多くの新しい知見の価値をいささかも損なうものではない。

よって本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また，平成19年2月22日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。